

課題名	<b>「原子カムラ」の境界を越えるための コミュニケーション・フィールドの試行</b>			
参画機関	特定非営利活動法人パブリック・アウトリーチ、 一般社団法人日本原子力学会、国立大学法人東京大学（平成24年度のみ）			
事業規模	期間	平成24～26年度	総額	68百万円
<b>【研究代表者】</b>		木村 浩		
		特定非営利活動法人 パブリック・アウトリーチ 研究統括		
<b>【研究概要】</b>				
<p>原子力業界は、なぜ社会から「ムラ」と認識されるのだろうか。「ムラ」を形作るのは、ムラ内部の構成員の凝集力ばかりではない。「ムラ内部の構成員」と「世間（Public, 集合としての市民）」との相互作用によって、お互いが「境界」を作り上げた状態、すなわち、市民と専門家の間にギャップの存在する状態と捉えることができる。本研究が目指す目標とは、このギャップを越えることによって、適正な情報を社会が獲得できるようになるための風土を作り出す第一歩を踏み出すためである。</p> <p>そのために、市民と専門家が対等な立場で、お互いの間のギャップを認識し、尊重し、お互いが歩み寄っていくための土台をつくることを目的として、コミュニケーション・フィールド「フォーラム」を提案・試行した。フォーラムは、社会調査をベースとして、一般市民および専門家から10名程度ずつ参加者を選出し、同一メンバーで1回あたり3時間超の話し合いを5回繰り返す。そのような中で、「原子カムラ」の境界、すなわち、市民と専門家の間にギャップを越えていくことを目指した。その結果、フォーラムは良い効果をもたらすことが観測された。「思い込みと不信によるコミュニケーション不全という状況」から、リスク・コミュニケーションをするための「最初の一步を踏み出す＝お互いの思い込みを打破し、お互いをひとりの人として認識する」ためのシステムとして機能した。</p>				
<b>【その後の取り組み】</b>				
<p>本研究では、立場や価値観の異なる人々が適切に話し合うためのシステムや材料を明確化し、提供した。これらは研究実施当時から、既に多くの環境・エネルギーに関するコミュニケーションの現場で使われている。</p> <p>また、代表者は、現在、原子力という枠組みにとらわれず、エネルギー全般に関するワークショップや、地球温暖化問題に関するコミュニケーションにおいて、本研究で得られた知見を適用させている。他の研究分担者・協力者においても、それぞれの分野で同様に活動を継続させている。</p>				

～「フォーラム」の基本的な進め方（イメージ）～



- ①グループワークは、6～7名の3グループで行った。どのメンバーとグループになるかは、くじ引きで決めた。話し合いはブレインストーミングの形を取り、ルールも明確にして、参加者で共有した。
- ②グループの中の1名がファシリテーターになり、グループの話し合いを進めた。ファシリテーターもくじ引きで決めた。運営側は各グループに2名のサブファシリテーターを用意し、進行を支援した。
- ③グループワークの後の全体共有の様子。3グループがそれぞれ話し合った結果を全員に話す。3グループのまとめはそれぞれ全く異なる視点で語られることがほとんどであり、参加者に多様な意見の存在を認識してもらえる機会となった。

※実際の参加者情報は示せないため、関係者が準備として行った模擬フォーラムの様子を示している。

代表的な特許、論文受賞など

【発表論文等】

1. 土田昭司、「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション (1) 市民と専門家間に存在する心理的境界、日本原子力学会誌アトモス 56(4), 245-249, 2014
2. 木村 浩、「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション (2) 「フォーラム」という取り組み、日本原子力学会誌アトモス 56(5), 318-322, 2014.
3. 篠田 佳彦, 土田 昭司, 木村 浩、エネルギーと原子力に関する定期意識調査(首都圏住民)、日本原子力学会誌和文論文誌 13(3), 94-112, 2014.